

大学におけるスキー教室のあり方に関する研究

水野 敏明¹⁾・大島 等²⁾
山本 英弘²⁾・山崎 旭男³⁾
大塚 三雄¹⁾・青山 武久⁴⁾

I はじめに

大学におけるスキー教室は、ゲレンデや宿舍、それに交通機関による災害や事故などによる数多くの障害、或いはスキー用具の改善、スキー技術及び指導法のめまぐるしい変遷等、一般スキーヤーのかかえている諸問題と同様に数多くの問題を背負いながらも、現在なお多くの大学で継続・実施されている。

本研究は、大学の関与するスキー教室に参加した学生の中で、しかも1986年のシーズン期間中に開催されたスキー教室に参加した学生を対象とした。この対象の学生に「スキー教室参加の動機及び意識」と教室終了時における「スキー教室の感想」、さらに次回への「スキー教室への要望」等の三点を中心に質問した。その結果、それぞれのアンケート項目と内容の集計、および分析から、学生たちが最も期待し、希望している大学におけるスキー教室のあり方を把握することを第1のねらいとした。第2は大学のスキー教室開催における募集方法や実施方法などの管理・運営面の把握とし、第3はスキー教室におけるスキー技術指導方法の一助にも役立てようとするものである。

II 調査対象及び調査方法

調査対象は岐阜県の大学3校および愛知県の大学1校である。これらの大学で開催された7回のスキー教室を対象とし、参加学生は男子370人、女子259人の総計629人である。年齢構成は男子では18歳から25歳および26歳以上5人であり、女子は18歳から24歳未満であった。

調査期間は昭和61年12月下旬から昭和62年3月上旬で、7回実施されたすべてのスキー教室のいずれにも教室終了日の前日に質問紙法によって調査した。

-
- 1) 中日本自動車短期大学 Nakanihon Automotive College.
 - 2) 朝日大学 Asahi University.
 - 3) 聖徳学園女子短期大学 Shotoku Gakuen Woman's Junior College.
 - 4) 平田研究所 Hirata Institute of Health.

質問紙の内容は「スキー歴について」4項目、「スキー教室参加の意識」6項目、「一般スキーヤーとしての意見」5項目、「スキーの用語について」3項目、「スキー、或いはスキー教室に対する意見」1項目の5要因19項目で構成した。

集計は電算システム株式会社に依頼した。

III 結果と考察

1 スキー教室の主催と参加学生の実態について

本調査の大学別対象者についての一覧表を表1-1に示した。大学のスキー教室の歴史は、大学の規模（総合大学・単科大学・短期大学）や教育方針（スポーツ・躰・教養など）、さらには成績（体育大学・体育学部・教育学部・体育学科、または一般教育科目の必須単位として）などと深い関係を保ちつつ開催されてきた。またスキー教室の主催者については、主に自らの大学の実状に応じた目的や実施方法など、そのねらいに沿った教室が開催されてきた。

このような特色を持つ現在の大学におけるスキー教室の開催を大別すると、①正課体育の一環として実施する。②正課体育と課外活動の共通として実施する。③課外活動の一貫として（すなわち参加者が自主的参加）実施する場合の三方法で開催・運営され、実施されている。

表1-1 大学別一覧表

統計		大学別		C 大 学		D大学	E 大 学	
		A大学	B大学	C-1	C-2		E-1	E-2
N	629	25	171	112	49	153	54	65
%	100	4.0	27.2	17.8	7.8	24.3	8.6	10.3

表1-2 課外・正課別参加状況

回答		課外活動	正課体育	その他	無回答
合計					
N	629	428	121	65	15
%	100	68.1	19.2	10.3	2.4

表1-3 年齢別・性別一覧表

性別			年齢別								
			18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳
全	629	N	54	229	91	188	49	8	2	3	5
	100	%	8.6	36.4	14.5	29.9	7.8	1.2	0.3	0.5	0.8
男	370	N	38	176	44	72	25	6	1	3	5
	58.8	%	10.3	47.6	11.9	19.4	6.7	1.6	0.3	0.8	1.4
女	259	N	16	53	47	116	24	2	1	—	—
	41.2	%	6.2	20.4	18.1	44.8	9.3	0.8	0.4	—	—

表1-4 スキー教室参加状況

回答		経験有り						初めて	無回答
		1回	2回	3回	4回	5回	6回以上		
N	629	448						163	18
		222	124	52	22	10	18		
%	100	71.2						25.9	2.9
		49.6	27.7	11.6	4.9	2.2	4.0		

本調査に於いては、スキー教室の7教室中、6教室が課外活動として実施され、残る1教室は正課体育と課外活動との共通として実施されていた。その内容と参加者の内訳を表1-2に示した。

参加者の男女別年齢構成を表1-3に示した。19歳から21歳の年齢層が最も多く、中でも男子は19歳の48%、女子は21歳の45%、の参加学生が多い。

参加学生のスキー教室への参加の状況を表1-4に示したが、初めてスキー教室に参加した学生は163人、25.9%であり、448人、71.2%はすでに何回かのスキー教室に参加の経験を有している。

2 参加学生の意識

(1) スキー教室開催の情報について

スキー教室開催の情報を何で知ったかの内容を表2-1に示した。「友人」・「教員」・「先輩」からの順で、スキー教室開催の情報を得る割合が高く、特に女子では「友人」からの情報が、41.7%と非常に高い割合を示した。これを大学別・教室別に分類したものを表2-2に示したが、それぞれの大学や教室によって異なった傾向を示した。

(2) 参加の動機について

参加した学生の動機についてみたものを表2-3に示した。自ら進んで参加した学生が全体で

表2-1 スキー教室開催の情報(%)

回答 性別	友人	教員	先輩	掲示板	その他	無回答
全体	32.8	31.8	21.0	11.9	2.1	0.4
男子	26.5	38.1	21.6	10.6	2.4	0.8
女子	41.7	22.8	20.1	13.9	1.5	—

表2-2 スキー教室開催の情報(大学別%)

回答		友人	教員	先輩	掲示板	その他
A大	大	12.0	44.0	8.0	36.0	—
	B大	45.0	18.7	29.8	4.7	1.8
C大	C-1	27.7	19.6	33.0	17.9	1.8
	C-2	59.2	2.0	6.1	28.6	4.1
D大	大	15.7	64.7	15.7	2.6	1.3
E大	E-1	24.1	37.0	20.4	16.6	1.9
	E-2	47.7	27.7	6.2	16.9	1.5

表2-3 参加の動機(%)

回答 性別	自分から	他人によって	その他
全体	72.6	24.7	2.7
男子	64.6	31.0	4.4
女子	83.8	15.8	0.4

∴ C-1, C-2, E-1, E-2, それぞれC大, E大で開催された回数

表2-4 参加の動機(大学別)(%)

大学別	回答	自分から	他人によって	その他
A大		84.0	16.0	—
B大		87.7	11.1	1.2
C大	C-1	83.5	16.5	—
	C-2	79.6	20.4	—
D大		39.9	50.9	9.2
E大	E-1	74.1	24.1	1.8
	E-2	83.1	16.9	—

表2-5 参加の動機(課外・正課別%)

活動別	回答	自分から	他人によって	その他
課外活動		77.3	21.5	1.2
正課体育		54.2	37.5	8.3
その他		75.4	21.5	3.1

表2-6 自ら参加した理由(%)

性別	回答	技術の向上	やってみたい	技術の矯正	目標技術の修得	何となく	友人作り	その他
全体		62.7	21.8	5.3	3.1	2.9	0.7	3.5
男子		67.1	15.3	8.1	3.9	1.3	0.4	3.9
女子		57.9	28.7	2.3	2.3	4.6	0.9	3.3

表2-7 自ら進んで参加(スキー教室歴)

回数	回答	技術の向上	やってみたい	技術の矯正	目標技術の修得	何となく	友人作り	その他
1回		46.9	37.7	4.1	3.1	3.6	0.5	4.1
2回		78.7	7.2	4.7	3.9	3.9	0.8	0.8
3回		81.6	4.6	9.2	2.3	—	2.3	—
4回		75.0	5.0	10.0	—	—	—	10.0
5回		66.7	—	11.1	22.2	—	—	—
6回以上		73.3	20.0	6.7	—	—	—	—

表2-8 スキー経験日数と自らの意志による参加(%)

日数	回答	技術の向上	やってみたい	技術の矯正	目標技術の修得	何となく	友人作り	その他
5日以内		29.9	56.4	1.7	1.7	4.3	—	6.0
6-10日		74.8	10.9	4.3	5.0	2.5	1.7	0.8
11-20日		80.8	4.8	4.8	3.6	2.4	—	3.6
21-50日		70.0	5.0	15.0	2.5	2.5	—	5.0
51-100日		77.8	5.5	16.7	—	—	—	—
100日以上		71.4	—	14.3	—	—	14.3	—

72.6%と高い割合を示している。この参加の動機を大学別・教室別にみたものを表2-4に示した。前述の②正課体育と課外活動との共通で実施されている1教室に参加した学生の自ら進んで参加が大学別にみて少ない傾向がみてとれる。しかし正課体育として参加、課外活動として参加の分類でみたものを表2-5に示したが、正課体育であれ、課外活動であれ、いずれも「自ら進んで参加」による参加者の割合が高いといえる。

自らの意志によって参加した学生の参加理由についてみたものを表2-6に示した。参加の理由の中で最も割合の高かったのが、全体において「技術の向上」62.7%であった。これはスキー教室の参加回数（表2-7）とスキー教室の経験日数（表2-8）と密接に関わっていることがみとれる。またスキーの経験日数が5日以内の初心者と初級者においては、スキー技術の向上よりむしろ「やってみたかった」の項目に高い割合を示している。

他人に勧められて参加した学生で、参加を勧めてくれた人についてみたものを表2-9に示した。男女間に差がみられ、男子は「教員」の項目に割合が高いのに対して、女子は「友人」の項目に高い割合を示していた。

(3) スキー教室の魅力について

表2-9 参加を勧めてくれた人(%)

性別	回答	教員	友人	先輩	その他
全体		48.1	42.9	7.8	1.2
男子		63.7	28.3	6.2	1.8
女子		4.9	82.9	12.2	0

スキー教室に参加しようとする場合、どのような点に魅力を感じて参加を望むのかについてみたものを表2-10に示した。「費用が安い」こと、「指導講師が良い」こと、「技術の修得ができる」こと、「学友生活が楽しい」こ

表2-10 スキー教室の魅力(%)

性別	回答	費用	講師	技術	学友生活	スキー場	宿泊	教師親睦	交通機関	スキー用具	その他
全体		25.9	18.5	17.8	16.4	6.4	5.0	4.6	2.8	2.5	0.1
男子		23.8	17.1	20.7	13.1	8.2	6.2	4.8	2.8	2.8	0.5
女子		28.5	20.2	14.1	20.5	4.3	3.4	4.3	2.7	2.0	0.0

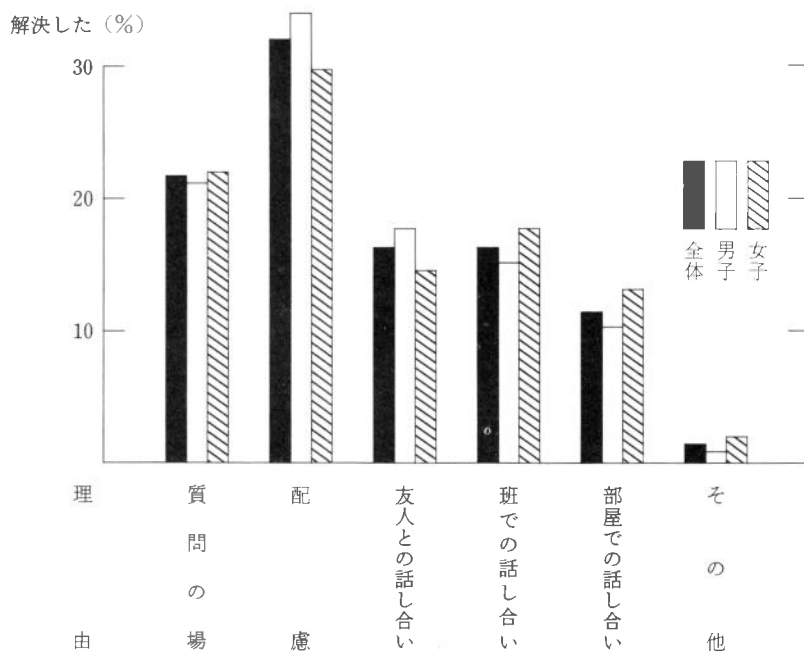


図2-1 課題の解決

との項目の順に割合が高い。スキー場とか宿泊施設などの物理的要素よりむしろ、費用と指導者に大きな魅力を感じていることがうかがわれる。

(4) スキー教室に対して課題を持って参加した学生の課題の解決について

スキー教室に何等かの目的達成のために課題を持って参加した学生は、男子271人(73.2%)、女子168人(64.9%)の総計439人(69.8%)であった。その課題の解決の有無を表2-11に示した。その課題の解決した理由を図2-1に示したが、「指導者の配慮」があり解決したとする割合が最も高く32.3%で、次いで「質問の場」があり解決したとする学生が21.9%、「友人同士で話し合った」で解決したとする学生が16.9%、「班の人同士で話し合った」で解決したとする学生が16.4%、「部屋の仲間同士で話し合った」で解決したとする学生が11.5%の順であった。また課題の解決ができなかった学生は、全体で40人、9.1%、(内男子27人10.0%、女子13人7.7%)であった。その理由をみると、「指導者の配慮がなかった」とする学生が25.4%、「質問の場がなかった」とする学生が22.2%で、両項目の割合が高い。これらのことは指導者側にかなり期待し、また指導者の配慮がいかに大切であるかが理解できよう。

(5) スキー教室の感想について

今回のスキー教室の感想についてみたものを表2-12に示した。その項目の中で楽しかった理由についてみたものを表2-13に示したが、いずれも男女差はみられない。楽しかった理由の多くは指導者側と思われる項目に寄せられている。それは「スキー技術」が上達した(13.0%)、「指導講師」が良かった(11.9%)、「班の人数」が適当であった(8.8%)、「いろいろな体験」ができた(8.7%)、「欠点の矯正」ができた(5.5%)、「目標技術」が修得できた(4.0%)等の項目があげられ、これらによって51.9%が楽しかった理由としている。他の要因は、宿舍の関係が20.4%(宿舍の生活がよくなった、宿舍の食事がよくなった、部屋の人数がよくなった。)であり、スキー場の関係が19.7%(スキー場の景色、ゲレンデの状態がよくなった、交通が適当であった。)であった。

表2-11 課題の解決(%)

回答 性別	ほぼ解決	どちらとも言えぬ	あまり
全体	42.8	48.1	9.1
男子	42.8	47.2	10.0
女子	42.9	49.4	7.7

表2-12 スキー教室の感想(%)

回答 性別	楽しかった	どちらとも言えない	楽しくなかった
全体	81.8	16.4	1.8
男子	75.4	22.2	2.4
女子	90.8	8.1	1.1

表2-13 楽しかった理由(%)

回答 性別	技術上達	講師	景色	人数	体験	友人	宿舍	部屋割り	食事	欠点矯正	ゲレンデ	交通	目標修得	その他
全体	13.0	11.9	9.9	8.8	8.7	7.8	7.6	6.9	5.9	5.5	5.4	4.4	4.0	0.2
男子	14.8	12.1	8.5	8.7	8.3	7.9	6.7	6.3	5.6	7.2	5.2	4.0	4.5	0.2
女子	11.3	11.3	11.1	8.9	9.1	7.7	8.5	7.4	6.2	3.8	5.5	4.8	3.4	0.6

以上のことから学生のスキー教室に対する満足度を左右する要因は指導講師の姿勢によるものが大きいと思われる。

3 参加学生のスキー技術における意識について

(1) スキーを初めて指導した指導者について

スキーを始めた時に、初めてスキーの指導をしてくれた指導者についてみたものを表3-1に示した。男女別にみると、男子では「友人」か「先輩」が最も多く、次いで「大学教員」、「家族」の順であった。女子は「大学教員」が最も多く、次いで「友人」か「先輩」、「スキー学校の指導員」の順であった。「友人」・「先輩」が高い割合を示した理由として考えられるものの一つに、地域的なことが考えられる。岐阜県は多くのスキー場を持ち、各大学所在地から1・2時間程度自動車で行けばスキー場が点在し、手軽かつ気楽に行くことができるためと思われる。また「大学教員」が高い割合を示した理由の一つに、前述の如く参加者の25%が初心者であること、ことに女子はこれらのスキー教室によって「大学教員」から指導を受けていることが考えられる。しかし最近では高等学校の修学旅行の一部が様相を変え、スキー旅行を修学旅行としてとり入れられるようになっており、今後は初めて指導する指導者に変化がみられることが予想されよう。

表3-2は自己申告によるスキーの技術程度を調査したものである。スキー技術程度を以下のように分類した。

「スキー技術1」一技能テスト1級もしくはそれ相当である。

「スキー技術2」一ヴェーデルンができる。

「スキー技術3」一パラレル・ターンができる。

表3-1 最初の指導者(%)

性別 \ 回答	大学教員	友人か先輩	スキー学校の指導員	家族	高校教員	中学教員	その他
全体	26.8	25.0	14.7	14.4	7.9	1.2	10.0
男子	19.3	25.5	14.9	18.5	9.2	1.7	10.9
女子	37.4	24.4	14.6	8.7	5.9	0.4	8.6

表3-2 スキーの技術程度

技術別	N	%
スキー技術 1	5	0.8
スキー技術 2	31	4.9
スキー技術 3	125	19.9
スキー技術 4	228	36.3
スキー技術 5	197	31.3
無効	43	6.8
計	629	100

表3-3 技術程度と指導者(%)

回答 技術別	大学教員	友人か先輩	スキー学校の 指導員	家 族	高校教員	中学教員	そ の 他
スキー 技術 1	—	—	—	80.0	—	20.0	—
スキー 技術 2	6.5	22.6	12.9	38.7	6.5	—	12.8
スキー 技術 3	11.2	24.8	9.6	28.8	8.8	4.0	12.8
スキー 技術 4	22.4	30.3	16.2	11.8	9.6	—	9.7
スキー 技術 5	25.9	25.8	14.7	14.8	8.0	1.4	9.4

表3-4 スキー技術とスキー経験日数(%)

技術別 日数	5日以内	6~10日	11~20日	21~50日	51~100	101日以上
スキー技術 1	0	0	0	0	50.0	50.0
スキー技術 2	15.0	0	5.0	15.0	50.0	15.0
スキー技術 3	12.4	20.0	31.4	23.8	10.5	1.9
スキー技術 4	22.4	39.2	28.6	8.6	0.8	0.4
スキー技術 5	67.0	26.3	5.0	0.6	0	1.1

表3-5 スキーをどのように思うか?(%)

性別 回答	スポーツ	レクリエーション	遊 び	その他
全 体	65.2	18.3	15.2	1.3
男 子	59.2	20.4	18.8	1.6
女 子	73.7	15.3	10.2	0.8

「スキー技術4」—シュテム・ターンができる。

「スキー技術5」—プルーク・ボーゲンができる。とした。

初心者や初級者、そして中級者の参加者は多いものの、上級者すなわちスキー技術程度による分類でスキー技術1のレベルの参加者は非常に少ないことがみてとれる。スキー技術1については少数(N=5)のため、考察では参考程度に考えたい。

表3-3はスキーを初めて指導した指導者をスキー技術程度によって分類したものである。スキー技術1・2・3のレベルに於いては、家族が指導者となっている割合が高い。このことは近年のファミリースキーの普及による影響が大きいことと地域性からみて、手軽にスキーを経験できることなどが考えられよう。

(2) スキーへのとり組みの意識について

スキーをどのように思っており組みんでいるかについてみたものを表3-5に示した。スキーを「スポーツ」としてとり組みんでいる学生が全体で65.2%と高い割合を示した。これをスキー技術程度によって比較してみると、スキー技術のレベルが高くなる程「スポーツ」としてとり組みんで

いる学生の割合が高くなっている。

(3) スキーの効果について

スキーをすることによって、どのような効果が求められるかについてみたものを表3-6に示した。スキーの効果は「気分転換にある」と答えた学生の割合が最も高く、次いで「体力づくり」、「仲間づくり」の順であった。前項のスキーのとり組みとの関連でみると、スキーをスポーツとしてとり組んではいらぬものの、どちらかと言えば積極的な体力づくり、健康づくりよりむしろ、精神的な効果・効用を求めてスキーをしていることが理解できよう。

(4) スキーヤーの理想とする滑りについて

スキーヤーのあこがれである理想の滑りについてみたものを表3-7に示した。「ゲレンデを自由自在に滑りたい」と「スキーを揃えて滑りたい」の双方で合計87.2%を示す。このように滑ることが一般スキーヤーの理想とする滑りであることが推察される。これをスキーの技術程度でみたものを表3-8に示したが、ほぼ同じ傾向を示している。スキー技術2では、ゲレンデを自由自在に滑りたいが32.3%で、次いで「新雪や深雪を滑れるようになりたい」が22.6%の順で高い。この中級や上級と思われるレベルでは、すでにスキーを揃えて滑ることをマスターし、より実践的な新雪や深雪を滑ることに理想を求めているものと思われる。

(5) 現在目指しているスキーの技術目標について

現在学生たちが目指しているスキーの技術目標を表3-9に示した。男子はパラレルターン、ジャンプヴェーデルン、ヴェーデルンの順で割合が高く、女子ではパラレルターン、ヴェーデル

表3-6 スキーの効果(%)

回答 性別	気分転換	体力づくり	仲間づくり	健康づくり	その他
全体	39.6	23.4	18.2	10.1	8.7
男子	41.1	23.9	15.2	10.7	9.1
女子	37.5	22.6	22.6	9.3	8.0

表3-7 スキーの理想(%)

回答 性別	A	B	C	D	E	F
全体	54.3	32.9	5.2	3.1	2.9	1.6
男子	51.9	28.8	7.7	4.4	4.7	2.5
女子	57.6	38.8	1.6	1.2	0.4	0.4

表3-8 技術程度と理想(%)

技術別	回答	A	B	C	D	E	F
スキー技術 1		40.0	—	—	—	40.0	20.0
スキー技術 2		32.3	6.5	22.6	19.4	19.4	—
スキー技術 3		54.0	23.8	11.1	5.4	5.6	—
スキー技術 4		52.6	38.7	3.0	2.2	2.2	1.3
スキー技術 5		59.5	37.0	1.0	2.2	—	2.0

- A：ゲレンデを自由自在に滑りたい
- B：スキーを揃えて滑りたい
- C：新雪や深雪を滑りたい
- D：ポールを滑りたい
- E：指導者になりたい
- F：その他

表3-9 目標のスキー技術(%)

回答 性別	パラレル ターン	ヴェーデルン	ジャンプ ヴェーデルン	ステップ ターン	シュテム ターン	その他
全体	46.8	16.9	15.2	8.4	8.1	4.6
男子	42.8	16.9	22.2	10.5	3.8	3.8
女子	53.0	16.7	4.2	5.1	14.9	6.1

表3-10 技術程度と目標(%)

技術別	回答	パラレル ターン	ヴェーデルン	ジャンプ ヴェーデルン	ステップ ターン	シュテム ターン	その他
スキー技術 1		—	40.0	—	20.0	20.0	20.0
スキー技術 2		16.1	12.9	58.0	6.5	—	6.5
スキー技術 3		26.1	38.7	23.5	10.9	0.8	—
スキー技術 4		64.0	15.2	7.4	8.8	3.2	1.4
スキー技術 5		47.9	5.3	12.3	5.9	19.3	9.3

ン、シュテムターンの順であった。さらにこの技術目標をスキー技術程度でみたものを表3-10に示した。スキー技術4・5ではパラレルターンを技術目標とし、スキー技術3ではヴェーデルンを、さらにスキー技術2ではジャンプヴェーデルンを技術目標としているのがみてとれる。

近年S.A.J等^{1,2,3,4,5)}のスキー技術のくみたてや指導方法をみるに、スキーの回転技術には、脚を交互に使うものと、同時に使うものとの二つの要領が示され、一般的に前者を活用し、その指導の展開や技術目標は、プルクからプルクボーゲンへ、シュテムターンへ、パラレルターンへ、さらにパラレルターンからよりスピーディーなステップターンへと導き、実践滑降へと進め、どちらかと言えば優雅さ、しなやかさを求めるスキーより、よりスピーディーで力強さを求めるスキーへ、つまり競技指向へと導かれている。しかし今回の参加者の理想とする滑りや、修得技術目標から考えられることは、交互操作であれ、同時操作であれ、終局的にはパラレルターンでありヴェーデルンである。そして実践滑降へと進み、実践滑降では「ゲレンデを自由自在に滑る」ことであり、躍動的なジャンプヴェーデルン、或は新雪や深雪を滑る技術を目指していることが推察される。

「パラレルターンやヴェーデルン」これらはいつの時代に於いてもスキーヤーのあこがれの合言葉である。従って指導する側は、これらの学生の課題や技術目標を十分に理解し、技術の組み立てや指導展開を考慮して指導法を立案すべきである。

スキー技術修得の一つの目安とされる級別テストの希望についてみると、希望する学生は全体で16.8%、男子が21.6%、女子が10.1%と少ない。この希望する学生をスキー技術程度でみたものを表3-11に示したが、スキー技術のレベルが高い者程、希望する割合が高くなる傾向がみて

表3-11 技術程度と級別テストの希望(%)

技術別	回答	有り	わからない	無し
スキー技術 1		75.0	25.0	—
スキー技術 2		55.2	27.6	17.2
スキー技術 3		36.1	35.3	28.6
スキー技術 4		12.8	43.6	43.6
スキー技術 5		3.5	40.4	56.1

表3-12 スキー用語の難易度(%)

性別	回答	良く分かる	どちらとも 言えない	難しい
全体		10.1	47.1	42.8
男子		13.1	52.3	34.6
女子		5.8	39.7	54.5

表3-13 技術程度とスキー用語の難易度(%)

技術別	回答	良く分かる	どちらとも言えない	難しい
スキー技術 1		80.0	20.0	—
スキー技術 2		38.7	38.7	22.6
スキー技術 3		22.1	53.5	24.4
スキー技術 4		6.5	51.1	42.4
スキー技術 5		2.0	40.0	58.0

表3-14 将来のスキー用語(%)

回答 性別	世界共通 の用語	何でも 良い	日本語	分から ない
全体	41.3	37.6	8.8	12.3
男子	38.5	40.5	12.0	9.0
女子	45.1	33.5	4.3	17.1

とれる。

(6) スキー用語の難易度について

スキー用語の理解は指導上、大変重要な部分を占めるものである。スキー用語の難易度（よく理解できる・むずかしい）についてみたものを表3-12に示した。今まで耳にしたスキー用語が「難しい」と答えた学生の割合が高く、これに対して「良くわかる」と答えた学生の割合は10.1%と大変低い割合を示した。ことに女子はさらに低い割合を示している。

表3-13はスキー技術程度とスキー用語の難易度についてみたものである。スキー技術程度のレベルの低い程「難しい」と答えている。このことは、スキー用語に馴染みがないことや、スキー用語が、ある時は独語であったり、英語、仏語で使われるなど、その意味が理解できなかったり、不十分であったりすることによるものであろう。スキー技術程度の高いレベルでは「良くわかる」と答えているが、その割合は誠に少ない。

以上のことから大学生ですら現在の使われているスキー用語は「難しい」と思っていることがわかる。従ってスキー指導に於いては、特に初心者や初級者或いは中級者レベルでは、専門のスキー用語よりむしろ理解しやすい言葉で表現すべき努力が重要である。

IV む す び

昭和61年12月下旬から昭和62年3月上旬の期間中に実施された大学のスキー教室、7教室に参加した学生、男子が370人で、女子が259人の総計629人について、大学におけるスキー教室のあり方に対する調査を行った。その結果を要約すると以下のようである。

- ① 参加学生の実態は、初めてスキー教室に参加した学生は26.7%であり、スキー教室に参加の経験のある学生が73.3%であった。
- ② スキー教室開催の情報は、友人・教員・先輩からの情報が高い割合であった。
- ③ 参加の動機は、自ら進んで参加する積極派の学生の割合が高い。
- ④ スキー教室の魅力は、費用が安いことと、指導講師が良いことである。
- ⑤ 課題を持って参加する学生の割合は高く、その課題解決のために、指導者の考慮や配慮を求めている。
- ⑥ スキーをスポーツとしてとり組んではいないものの、積極的な体力づくりや健康づくりより

むしろ精神的な効果を求めている。

- ⑦ 目指しているスキーの技術目標は、パラレルターン・ヴェーデルンである。
- ⑧ 現在使われているスキー用語は難しく、指導においては専門用語より理解しやすい言葉で表現すべきである。

本研究の一部は第38回日本体育学会（1987. 9. 13. 立命館大学）において発表した。

本研究を進めるに当たって、助言を賜った岐阜大学医学部衛生学教室の大森正英博士に厚くお礼申し上げますと共に、ご協力いただきました岐阜大学教育学部の高野卓哉教授、同教養部の大淵正雄教授に深謝致します。

参 考 文 献

- 1) 全日本スキー連盟：日本スキー教程：K.K. スキージャーナル：1987
- 2) 全日本スキー連盟：日本スキー指導教本：K.K. スキージャーナル：1987
- 3) オーストリア職業スキー教師連盟：オーストリアスキー教程シュビンゲン1980
- 4) ルッキー・シャラー著：オーストリアスキー：K.K. 山海堂：1986
- 5) アルフレッド・アウアー著：実践スキー上達法：K.K. スキージャーナル：1984